

憶良の瓜と栗

木村 千恵子

子等を思ふ歌一首

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まし
 て思はゆ 何処より 来りしものそ 眼交
 にもとな懸りて 安眠し寝さぬ(八〇二)

反歌

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及か
 めやも(八〇三)

この歌は憶良の他の歌々のように難しいところもなく、一読判然誰もが素直に共感できる心情が盛られている。しかし私はこの歌をみるごとに、憶良は「何故瓜と栗を特に選んだのか」と言うことが疑問に思われ、又「何処より来りしものそ」の考え方について、従来の考え方の他に何かあるのではないかとの想いをいつも禁じ得なかつた。

一 瓜

考古学の研究によると、我が国土には縄文時代前期^BC四千年頃にはすでに瓢箪が存在していたようであるし、古墳時代前期(三〜四世紀)にはマクワウリも伝来し、我が国への瓜類の伝来、及びその栽培は弥生時代にまで遡れるようである。^(注1)奈良時代には、青瓜、真桑瓜は園地で耕種して進上され、熟瓜、黄瓜等は、当時生菜類ではなく菓類として扱われ、価格も高く使用も上層者の節日料として給されていた。^(注2)

考古学による古代の井戸祭祀遺物の研究は、井神、水神への古代人の考え方を知るのに興味深いものがあるが、その出土遺物の中に、瓜の種子、桃の核、瓢箪の存在すること

は見逃がすことができない。

古代八井の伝説のある橿原の橿原神宮外苑三十二万坪の地域が橿原考古学研究所によって調査され、同地域に二十二の上代井が発掘精査された。^(注3)その報告書『橿原』によると、二十二のうち七つの井より桃の種核が、二つの井から瓢が、一つから瓜の皮、別な一井から瓜の種の出土が報告されている。同書と『日本上代井の研究』『井戸の研究』^(注6)によると上代井遺構からの出土品には、やはり桃と瓜の種子があることに注目したい。上記の諸書^(注7)の研究によると瓜と桃は井神祭祀の折水神に投供されたようである。

栗について芸文類聚は「春秋、冬祠皆用栗」^(注8)とあり、中国では「栗は尊ばれ祭に用いられた」^(注9)ことがわかる。それでは我が国の神饌には瓜と栗はどのように扱われていたのであるうか。滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫各府県下の代表的神社の一月から十二月までにわたる四十四の祭礼の神饌を見ると、大方の神社の神饌に栗は必ずあり、栗は中国同様日本でも祭には欠かせないものであったことが分る。これに反して瓜の方はほとんど含まれておらず、僅か数社に胡瓜、南瓜、干瓢が認められるのみである。それもトマトやホーレン

草などと一緒にならべられている様子は、どうやら古式ではなく後々になってから付加された感が深い。現今では大分緩んではいるが多くの神社は神饌に關して一般に排他的、閉鎖的で別外者には見せず、伝承の古式に則り時には別火を鑽火し、紋付袴又は素袍に冠をつけ和紙で口覆いまでして調製盛り付けされる。その古式伝承の神饌に瓜を供する神社がほとんどないのは何故であろうか。延喜式の水関係祭祀研究によると、水神と瓜ないしは匏（注11）と瓢（注12）は特別な關係が認められ、平安時代にも水神祭祀には是非供獻すべきものであったようである。時代はずっと下るが「徳川時代には、初出の胡瓜を川に流してこれを河伯に供する」といふ奇習があった（注12）。

『本朝食鑑』には「京の俗言に祇園神社の氏人が胡瓜をたべると必ず祟りがあるといふ……」と書かれているが、これは祇園社の祭神はスサノオ命で、スサノオは大海岸を司る神即ち水神であるからであろう。柳田国男は河童は水神の成れの果ての姿と言われる。どうやら上代では水神と瓜とは特別な關係があり、水神へは桃と瓜を特に供獻したと考えられる。そして瓜と言えば水神が連想されたのではないだろうか。

二 瓜子織姫

柳田国男に『桃太郎の誕生』（注14）という研究がある。氏によると桃太郎や瓜子姫説話は

- ① 水の流れを下って来た
- ② このみどり児は授かった児
- ③ 瓜と桃が水上から浮いて流れてきた
- ④ 水に浮かび流れ岸の老女の手に達したというのが特徴で、氏は「瓜とか桃が川上から流れて来て、その中から赤子が生まれる」という部分こそ「見通すことのできない我々の固有信仰の大切な信條」であつたといわれる（注15）。

「諸国の水分神社が屢々子授けの神として信仰されており、例えば吉野の水分神社は子守明神、子守さんと呼ばれ子授け神の信仰が深い。」本居宣長は、吉野の水分神社に祈つて授けられた水分神社の申し子であるといわれている。『後漢書東夷列伝』に、海中に女国があり男がいない。伝えによると其の国には神井があり、そこをぞくと子を生むというところ。古事記に、天真名井の誓に於て御子神が生まれたといふことも、御子神は二神の物実によつて成りませるのであるが、物実を井に振りそそぐ事によつて御子が生まれたとい

う点に井と子生みに関わりを持つものである（注16）。かもしれない」ともかく古くから水（井）と子生みという信仰素地があつたようである。水と子生み。「水神と瓜」そして「川上から流れ寄る瓜の中から女の子が生まれる」という口碑は、決して無關係ではないと考える。

「瓜子織姫」の研究で、柳田氏は、岩手、信濃、阿波、日向、出雲、石見、津軽、秋田、会津、新潟、富山の諸地方から二十一つの瓜子姫説話を採集された。氏の採集は昭和初期のものであるが、その後この種の研究が盛んになり、昭和五十年代には、桃太郎も瓜子姫の伝承もほぼ全国各地から採集報告されている（注18）。特に鳥取県、島根県からは広汎にわたる多数採集されている。因幡伯耆は現在の鳥取県で、出雲、石見、隱岐は島根県である。

延喜式には祀られた井戸や清水の記録はほぼ全国的に見られるが、古風土記には井についての物語や地名起源説話は多いが祀られた井戸、清水を記載するのは出雲風土記だけである。これは出雲風土記の編者が特別周到な注意をもつて編纂したというより、出雲地方、拡大して山陰地方一帯では水霊信仰が盛んであつたと考えられる。

書紀推古天皇二十五年の条に「出雲国言

神戸郡有瓜 大如^レ缶^レとある。この年の書紀の記載は全くこの一行のみで、しかも「出雲国言」として瓜のことが堂々と正史に特筆記事として記録されたのはどのような意味があったのであろうか。又統日本紀には風土記作製の命の出た和銅六年の条第一行目に「伯耆国献嘉瓜」との記載もある。出雲系神話にも顯著であるが、古くから山陰地方と水霊信仰そして山陰地方と瓜とは相当縁の深いものがあつたと思われる。

既に述べたがこの国土への瓜の伝来は非常に古い。現代になつてではあるが、山陰の各地から盛んに瓜子姫の古い口碑が採集されている。これは口碑であつて、時代の分る古文獻に記載されたものはないが、柳田氏は、桃太郎の原型は既に神話時代にあり、瓜子姫はそれよりも更に古い説話であらうと考へておられる。そこで憶良時代には、水霊信仰の盛んな出雲神話圏に属する山陰の国々々に、やはりこの口碑は伝承されていたと推定してよいのではあるまいか。ともかくもこの話は昔々爺と婆があつた。爺は山へ木を樵りに、婆は川へ洗濯に行った。川上から瓜

が流れて来た。婆がその瓜を拾ひ上げて持ち帰り、爺と共に切つて食べようとす

ると、瓜の中から可愛らしい女の子が出てきた……後略
というパターンは、日本全国共通している。

三 伯耆守

憶良は唐から帰国して壺亀二年(七一六)伯耆守に任命された。^(注22) 統日本紀によると、養老元年(七一七)九月、元正天皇は美濃に行幸された。九月十一日出発、二十八日還幸されたが、この行幸の折、天皇は行在所に各地の国司を招いて歌舞を奏せしめられた。遠国は回避されたが、九月十二日近江の行在所に

は、山陰は伯耆、山陽は備後、南海は讃岐以内の国々、十八日美濃には、東海は相模、東山は信濃、北陸は越中以内の諸国が召された。前年着任して伯耆守であつた憶良も、この時勿論任国の歌舞団を率いてはるばる近江の行在所に伺候したのであろう。統紀には、近江では「土風歌舞」美濃では「風俗之雜伎」と記されているが、国々に伝承された土着の歌舞、雜伎その他くさくさ奏上されたであろう。中西氏も、当時伯耆に伝えられた土風の

歌舞がどのようなものか分らないが、万葉集巻十六に収録される家持が書きとめた弥彦の鹿舞の歌とか、熊来の民謡、各地の白水郎

の歌から連想して

国司なるものが予想以上に土着の風俗と密接な関係をもつものだった一証としてこの憶良の歌舞奏上のことを考えることができる。^(注23)

といわれる。家持は後年越中の国司であつた。

憶良は着任の翌年天皇へ土風の歌舞奏上という特殊な機会に遭遇した。任国内の草深い民間に伝承されている民俗、歌舞を捜し集め検討して特色あるものを選ぶのは国司としての任務であつたらう。

土着の語りもあつたに違いない。筑前においてあれ程熱心に土着の伝承や事件に関心を示した彼であつてみれば、ここでも同様だったと考えられる……^(注24)

とは中西氏のご指摘であるが、前記の歌舞奏上と言う特殊な任務もあつたことであり、憶良は伯耆時代土着の語りとしての「瓜子姫」口碑に接したのではないだろうか。

四 憶良と地方伝承

中西氏も指摘されるように、万葉集に残された作品をみると、憶良は伝承になかなかの関心を寄せていたらしいことが窺える。「七

夕(注5)の歌」も深くはふれられないが七夕伝承に關係がある。「鎮懐石の歌」(注26)は息長足日女命の伝承であり、「松浦追和歌」(注27)は松浦左用姫と神功皇后の伝承である。「竹取翁の歌」(注28)もし彼の作であるならば、彼の伝承、故事へのなみなみならぬ関心の程も推察される。鎮懐石の伝承には記紀系のもとと釈日本紀所引の筑紫風土記、筑前風土記系のもとと二系統あって、憶良はその後者によっているのに注目され中西氏は、

そうした語りのタイプにおいて、記・紀という中央朝廷に成立した二書と釈日本紀の風土記が異なるというのは、後者がより土着の伝承型を示すというべきであらう。ところが、万葉歌(筆者注憶良作歌)はこの後者に近い。……それを伝えたのは左注によると那珂郡伊知郷の衰島の人、建部牛麻呂だったが、その「伝言」をそのまま写そうという態度を基本的に考えておかねばならないだろう。……といわれる。憶良は中央の記録である記紀の所伝を知っていたであらうが、にもかかわらず在地の人、牛麻呂の語る地元の伝承を踏まえて彼の鎮懐石歌の作をものしたのである。ここに土着の語りを聞く憶良の姿勢を見るこ

とができる。松浦川の歌についても氏は、旅人は、松浦川の仙女に中心の興味を抱いた……旅人のこの「遊仙窟」まがいの空想と対照的に、憶良は領巾振山や次の神功皇后伝承という「故事」に関心があつた。……そこに憶良的なものがある(注30)といわれる。

また憶良は、紀州の磐代では有間皇子伝承(注31)に関心を示し追和歌を作っている。熊擬哀悼歌や志賀白水郎歌(注32)では地方庶民の出来事への関心がみられる。こうしてみると国司憶良は古くからの伝承や故事にも、当代の事件にも任国内外の事柄に広くアンテナを張り廻らしていたことが察せられる。以上は筑前時代のことであるがそれより数年前の伯耆時代といえども彼の姿勢がそう甚しく異っていたとは考えられない。むしろ伯耆時代、元正女帝へ土風の歌舞奏上という国司としての仕事によって、或は高橋虫麻呂(注34)がそうであったらしいように(古)風土記編纂へ参加したのである。営みを通して土着伝承への関心は呼び覚められたのではないだろうか。鎮懐石歌や松浦追和歌には、旅人の存在とそれに関連して作品化される一つの契機があった。伯耆時代には契機がなかったのであろう彼の歌も文章も一作

も残されていない。その頃憶良は忠実な国守として任務に精励格闘していたのである。しかしその格闘の任務の中に「古老相傳舊聞異事」(注35)に耳を傾けることもあり、その姿勢が次の筑前時代になって多くの稔りとなつたと思われる。

五 粟

古事記に応神天皇の歌と言われる

……上枝は 鳥居枯らし 下枝は

人取り枯らし 三つ粟の 中つ枝の

ほつもり……

というのがあるが、「たいへんよく日本原生種のクリの特徴をとらえている。種子が三つイガに包まれていることが多いが両端の実はいずれかもしくは二つともシイナで、中央にあるものだけ種子となる……クリも上流階級に属する人びとに供された……」(注37)古代では粟は山野に自生するものを採集したのであろうが、イガを割って三つ粟をとり出しても中央の一つだけが食べられ両側の二つはシイナである。延喜式に「平粟一斗二升五合を得る為に生粟子一石を要する」とある。平粟、生粟子とはどのようなものかよく分らないが、一石のものから一斗二升五合を得るとはまさに

18である。イガつきの栗一石からイガを除き両端のシイナを除き三つ栗の真中の平栗をとり出すと、18の量となったというのである。平安時代になっても栗は貴重なるものであったようだ。栗について『本朝食鑑』に「……出子丹波山中者為上、其大如鷄卵大、諸州種之、状雖相似不及丹之産……上野州下野州有山栗、極小、一年三度收栗、故号三度栗、其味不為不佳、此類山栗、在諸州亦極小、是古之杭栗乎」(注38)とある。丹波栗は現代でも珍重されているが、上代では庶民の入手できるような物ではなかつたであろう。二度栗、三度栗、七度栗のことが広文庫に記されているが、年に三度七度収穫とはどこまで信用してよいか分らないが、ドンクよりもクリの仲間とすればこれらのクリは現代人の考える栗とは違うクリで、もうこれは味よりも「貧民の用、飢饉の用意」のものであつたと考える。「中国西周、春秋時代には「瓠(ひさご)や匏(同上)は野生で葉が苦い。ニガイとは原始的な瓜の共通性で、後世のものであるがきゆうりの苦いのに閉口した覚えは誰しも持っているよう」(注40)上代では甜瓜、熟瓜、黄瓜は生菜類ではなく菓類であり、瓜も栗も現在我々が考えるようなものは庶民の

ものではなく、一般のものは味も悪く貧民の食か又は飢饉用に備蓄されたのであろう。特に飢饉用貧民用のクリは現代の我々が考える栗と同じではないと思われる。今日日本の菓瓜(メロン類)は諸外国に比して値段も安く又味も美味しいといわれるが、朝鮮、中国の瓜は美味しくないといわれる。農業技術の未発達な上代では現代の我々が考えるものとはるかにずれていて、瓜も栗もそれを食べて喜ぶ子供の姿とは直結しないと考える。上代、菓類として賞味された瓜や栗はとも子供のオヤツに供し得るものではなく、上流階級の節日料又は祭の神饌には欠くことのできぬ貴重な品であつた。憶良の周辺に、今日のような気軽さで菓類の瓜と栗が豊富にあつたとは思われない。

六 憶良の瓜と栗と

憶良には周知のように「恋男子名古日歌」(九〇四)という作がある。この長歌の冒頭、

世の人の 貴み願ふ 七種の 宝も我は
何せむに……

銀も金も玉も何せむにまされる宝子にし

かめやも(当国歌、反歌八〇三番)

という以前の作とよく似ていて「何せむに」を「何にかはせむ」とでもいえば短歌として十分独立し得るものである。この「古日」の歌は当国歌と違つて作歌時が明白ではないが神亀五年から天平五年迄の間の作とすると、時に憶良は六十九才から七十四才までとなつた。古日を彼の実子と考えるか否かには諸説あるが老憶良と幼子古日との年齢のずれについて「憶良は昔日に幼子喪失の経験を有し、この頃起つた現実の事件、他人の子の死に触発されて作つた」(注42)との説は注目し得る。当面の「思子等歌」について考えても、神亀五年憶良は六十九才である。それでも高木市之助氏は彼に幼子があつたとされるが、六十九才の老国司の子が瓜を食み栗を食んで喜喜として喜ぶ姿を思うような幼子とは考えにくいのではなからうか。中西氏も、「実際に幼子を考えることは不慮當でこれはあり得べき愛の絆をよんだ……」といわれる。

氏は更に、蔡邕、傷故栗賦より

嗟天折 以摧傷

を挙げ、栗が天折した子のようにあつかわれる……ともいわれる。小沢正夫氏は潘安仁の「思子詩」の

造化甄_二品物_一。天地代_二虚盈_一。奈何念_二

稚子_一。懐奇頤_二幼齡_一。追想存_二髣髴_一。

感道傷_二中傷_一。一往何時還。千載不_二復生_一。

をあげ、「一たび往きて何時か還る」と憶良

の「いづくより来りしものそ」との類似を指

摘され、この詩が亡兒哀悼の詩であるところ

から「憶良の歌も亡兒を思ふ歌か……」とも

言われる。^(注47)安仁詩と憶良歌の類似を指摘され

るのは同感であるが、氏が特筆される部分よ

りも「追想存_二髣髴_一。感道傷_二中傷_一」と「眼

交_二にも_一とな懸りて 安眠_二し寝_二さぬ_一」との類似

の方がより指摘されてよいのではないだろう

か。この他票について代匠記はつとに「陶淵

明が賁_二子詩云、通子垂_二九齡_一但覓梨_二与栗_一

をあげ淵明の「賁子」からの影響を指摘して

いる。とまれ在唐の経験もあり東宮侍講にも

抜擢された当代一流の知識人憶良は、前記の

賦も安仁や淵明の詩も知っていたであろう。

憶良文学に色濃く漢文学の影響が認められる

のは周知のことである。万葉集には愛_二恋_一の

歌は枚挙にいとまないが、子への愛の歌は少

なく、それは中国文学が好んで扱う主題であ

る。憶良は子への愛を歌おうとする時、海彼

の例を思い浮かべざるを得なかったであろう

し、彼の教養はそれを可能にした。又子への

愛という主題そのものも紛れもなく中国文学

の影響であろう。中西、小沢両博士のご指摘

は鋭いと思う。久松潜一氏も「ましてしぬば

ゆは生きている子どもをうたったとは到底思

はれない^(注48)」といわれる。

旅人の妻の死は憶良に深い衝撃を与えたよ

うである。万葉集によると当時大宰帥であり

上司であった大伴旅人に、その妻の死に對し

て憶良は神亀五年七月二十一日挽歌を献上

し、同日任地内巡視の旅に出かけたようであ

る。そして嘉摩郡において「令反感情歌」「思

子等歌^(注51)」と「哀世間難_二住歌_一」の三作を作った

ものと思われる。嘉摩郡での彼の三つの作歌

は「旅人の妻の死を契機とする人間省察の激

しい内攻である^(注53)」と中西氏はいわれる。人の

死を契機とした人間省察の内攻ならば、それ

はとりもなおよさず生と死の問題、人間とは

「どこから来てどこへ行くのか」との問に行

き着かざるを得ないであろう。それならば嘉

摩郡での三作のうち二作目の「思子等歌」

も単なる子への愛を歌っただけで大切な人間

省察の問題をす通りするはずはあるまい考え

る。生、老、病、死は晩年の憶良文学の重大

な主題であり、特に「当面歌はそれ以前の作

歌から飛躍的に変質する屈折点にある記念す

べき三作の一である^(注54)」といわれる。

井村哲夫氏は涅槃経・高貴徳王菩薩品より

身と命と自在の作なりや……父母の作な

なりや……何よりして来るや去りて何く

に至るや……是の如きの疑見無量の煩

悩、衆生心を覆ふ。

を引用し、この歌の「何処より 来りしもの

そ」はこの経文と同様の措辞であり、同様の

意味であるといわれる。^(注55)

紙数制限の為省略したが当面歌には漢文序

がある。諸説あるがともかくこの序の典拠も

経文と考えられている。序の典拠が経文であ

るのに徴しても、上記井村氏説は妥当と思わ

れる。しかし氏は「何処より来りしものそ」

だけをとりあげられ、この句が「瓜食めば

子ども思はゆ 栗食めば まして惚はゆ」に

続けられていることにはふれておられない。

この句が「瓜」と「栗」と「子」に結びつけ

て歌われていることにこそ特に問題があると

考えるのである。

七 まとめ

代匠記以来諸書が支持する陶淵明の「賁

子」でさえ梨と栗である。梨でも栗でも橘で

よいであろうに憶良は何故「瓜と栗」を歌っ

たのか、という素朴な疑問につかれていろいろ調べて行くうちに

- 1 一般の神饌にほとんど瓜がなく、瓜は特殊な扱いを受けていたらしいこと
- 2 しかし上代并遺構からは瓜の種子が出土し、瓜は水神に供献され、水神と瓜とはただならぬ関係が認められること
- 3 憶良の歌には伝承を主題とした歌がいくつもあり、口碑、伝承への彼の強い関心と姿勢が認められること
- 4 諸国へ(古)風土記編纂の命が下っていた時代であること
- 5 憶良は国司として、元正天皇へ「土風の歌舞奏上」という特殊な機会に遭遇し、この任務を通し伯耆の土着の口碑伝承に接したのであろうこと
- 6 伯耆国をも含む出雲神話圏に属する地方は、古代水霊信仰の盛んな地帯で、憶良時代、この地方には「水神の与え給うみどり児」としての瓜子姫伝承が語り伝えられており、彼もこの語りを伝え聞いたのではないかと考えられること
- 7 憶良の養老八年以後の作には、生、老、病、死を主題とする作品が多く、特に当面歌を含む嘉摩郡での三作は、その

転機となったものであること

- 8 当面歌には、潘安仁の「思子詩」と「傷故栗賦」の影響が認められ、亡児哀悼の想いがこめられているらしいこと
- 9 上代では、瓜や栗は一般的食物ではなくそれを食べて喜ぶ子供への連想は希薄であったと考えられること
- 10 「思子等歌」反歌と「恋男子名古日歌」の冒頭は酷似し、古日の歌には我が子天逝の体験が二重写しのように歌われていると考えられ、「思子等歌」も亡児哀悼と無縁ではないと考えられること

と

など、憶良をとりまくさまざまな事がらが想定される。これらを思い廻らすと当面歌には従来と違った解釈が考えられると思う。

既に記したが瓜は一般神社の神饌にもあまり扱われず、上代では瓜は特に水神に献供されたと思われる。そこで、上代にあっては瓜の連想は食物としてののではなく「瓜と水神」「水と生子生みと瓜」「瓜と水神の与え結うみどり児」ではなかったろうか。憶良は「瓜」を歌う時、伯耆で伝え聞いた「川上から流れ寄る瓜の中から生まれる女の子」¹¹「瓜子姫」の語り、そしてそれから連想され

る子の「生誕¹²生」を思い浮かべていたのではないだろうか。

「栗」を歌う時、「栗食めば まして偲はゆ……¹³眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ」には、陶淵明の「責子」から栗と幼子を想い、「傷故栗賦」や潘安仁の「思子詩」の亡児哀悼の詩を思い浮かべ、昔日に天逝した亡き子すなわち子の死を追想し「天逝¹⁴死」の省察があると考ええる。そういえば安仁詩は「思子詩」で憶良の歌は「思子等歌」で題も酷似している。

そこで、この歌の大意は

瓜を食べると子供の誕生のことが思われる。栗を食べると子の死が思われる。子は一切何処から来て何処へ去って行ってしまったのか。我が子として生まれ、幼くして逝った子のことを思うと、在りし日の姿が目先きにちらついて安眠もできな¹⁵い。

瓜と栗を憶良の生きていた時代の位相で捕えなおし、八〇二番歌には従来^(注57)の解釈とは違った内容が盛り込まれているのではないかと考え、試案を提出させて頂いた。

注

- ① ⑫安達巖『日本食物文化の起源』株式会社自由国民社
- ② 関根真隆『奈良朝食生活の研究』昭和四十四年 吉川弘文館
- ③ 紀元二千六百年奉祝事業の一として、昭和十三年～十四年にかけて橿原神宮外苑拡張工事が行われた。その折、同地区の大規模な考古学的発掘調査がなされた。これは、わが国における上代井の考古学の学問的発掘調査の最初のものである。
- ④ 『橿原』昭和三十年 橿原考古学研究所
- ⑤ ・日色四郎『日本上代井の研究』昭和四十二年 橿原考古学研究所
- ⑥ ⑪山本博『井戸の研究』昭和四十五年 綜芸舎
- ⑦ 上記三書によると、古代人は井及び河川・池沼には水神が宿ると信じその祭祀は古くから行われたことが記されている。現代でもなお祭祀の続いている処もある。
- ⑧ 『芸文類聚』巻八十七、菓部「栗」盧講祭法曰 春秋冬祠皆用栗
- ⑨ ⑭中西進氏、昭和五十七年度 成城大学院における「万葉集の比較文学的研究」の講義による
- ⑩ 岩井安美『神饌』昭和五十六年 同朋舎 近畿五府県下の代表的な神社の四十四の祭祀の神饌について二百数十枚の写真と共に説明されている。
- ⑬ 人見必大『本朝食鑑』昭和五十二年 平凡社刊
『東洋文庫312』
- ⑭ ⑮ ⑯ 『定本柳田国男集』第八巻 昭和三十七年 筑摩書房
- ⑰ 柳田氏の論文、初出の日付が昭和五年
- ⑱ ⑲ 『日本の民話』②③ 未來社
- 『全国昔話資料集成』（奥出雲者昔話集33）
（石見昔話集 36）
- 『日本昔話観』（島根18）同朋社
- 関敬吾『日本昔話大成』3 昭和五十三年 角川書店
- ⑳ 『統日本紀』巻七 元正天皇靈龜二年四月壬申 …… 從五位下山上臣憶良為「伯耆守」
- ㉑ 『統日本紀』巻七 元正天皇養老元年四月～九月
- ㉒ 『統日本紀』巻七 元正天皇養老元年四月～九月
- 月
- 丁未。天皇行幸養瀨國。戊申行幸近江國。 …… 諸國司等詣行在所。奏「土風歌舞」。甲寅至「美濃國」。 …… 諸國司等詣行在所。奏「風俗之雜伎」。 ……
- ㉓ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉔ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉕ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉖ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉗ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉘ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉙ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉚ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉛ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉜ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉝ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉞ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㉟ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊳ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊴ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊵ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊶ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊷ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊸ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊹ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊺ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊻ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊼ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊽ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊾ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊿ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ⑬ 古風土記は統日本紀に「載三千史籍」と命令されており、解文として中央に提出しなければならぬものであった。常陸風土記は立派な漢文で書かれており、当時、常陸國にあった藤原宇合や高橋虫麻呂が参加したのではないかと説がある。伯耆風土記は僅かの逸文が残るのみであるが、自ら「文」にたのむところあり、又万葉集にも多くの漢文を残す憶良は、多大の関心を払ったのではないかと考える。
- ⑭ 『統日本紀』巻六 元明天皇和銅六年三月～五月
- 月
- ⑮ 『古事記』中巻 応神天皇記「髪長比売」
- ⑯ 松山利夫『木の実』一九四三年法政大学出版局
- ⑰ 『延喜式』覆刻日本古典全集 延喜式(3) 昭和五十三年現代思潮社延喜式卷三十三 大膳職下造雜物法「平栗子料生栗子一石。得一斗二升五分」
- 合
- ⑱ 広文庫に本朝食鑑よりして記載されている
- ⑲ 篠田統『中国食物史』昭和四十九年 柴田書店
- ⑳ 高木市之助『吉野の鮎』（二つの生）一九七九年 岩波書店
- ㉑ 『芸文類聚』巻八十七 菓部「栗」「賦」後漢蔡邕傷故栗賦曰、人有折蔡氏祠前栗者……遇禍

賊之災人 睦天折以催傷

⑦小沢正夫「憶良・旅人と六詩人」愛知県立女子短期大学紀要第六輯

小沢氏は、安仁詩をひかれ、亡児を思う歌かといわれながらも、離れている子供を思ったとするのがよからうとされる。この点を久米常民氏も、稍々気になるところとして指摘される（久米常民『万葉集の誦詠歌』昭和三十六年 筑摩書房）。

⑧久松潜一「万葉集抄（二十六）」『解釈と鑑賞』昭和二十六年六月号 十八巻六号

⑨万葉集 巻五 七九四番～七九九番、日本挽歌一首と反歌五首とこれに続く嘉摩郡での三作 八〇〇～八〇五までは日附が同じである。

⑩⑪⑫万葉集八〇〇番～八〇一番、八〇二番～八〇三番、八〇四番～八〇五番

⑬井村哲夫「憶良「思子等歌」の論」『日本文学研究資料叢書 万葉集』昭和四十六年 有精堂

⑭当面歌序、釈迦如来 金口正説 等思衆生 如羅睺羅 又説 愛無過子……

⑮契沖『万葉代匠記』第二輯 大正十四年 早稲田大学出版部

井上通泰『万葉新考』巻五 昭和三年 国民図書株式会社

土屋文明『万葉集私注』第五巻 昭和二十五年 筑摩書房

武田祐吉『万葉集全註釈』第五巻 昭和二十四

年 改造社

沢瀉久孝『万葉集注釈』第五 昭和五十八年 中央公論社

川村孝次郎『万葉集研究』昭和四十八年 教育出版センター

高木市之助『大伴旅人、山上憶良』昭和四十七年 筑摩書房

久米常民『万葉集の誦詠歌』昭和三十六年 筑摩書房

これら数種の研究書に当たってみたが、「瓜と栗」についての異説は管見には入らなかった。⑩⑪⑫双方について契沖の万葉代匠記が一番古く又考えさせられるものがあつた。そこで左に記す。

⑩陶淵明・貢子詩云 通子垂九齡 但覓梨与栗⑪これにふたつの心あるべし。一には、いかなる過去の宿縁にて、わが子と生まれ出しものぞといふ心なり。二には、筑紫にて都に留めをける子どもを、瓜をはみ栗をはむにも、さらぬ時もおもかげにみゆるをいへり。